

13. 脳卒中後の尿閉に対する利水剤 (猪苓湯)の有用性

竹の塚脳神経リハビリテーション病院リハビリテーション科 脳神経外科

○宮上 光祐、岩崎 光芳、鈴木 康之

【目的】脳卒中後に尿閉に遭遇することが多く、尿閉に対するバルーンの留置はリハビリに支障をきたしたり、尿路感染を起こす。西洋薬による尿閉の治療では必ずしも改善できなかったり、副作用を起こすこともある。これまで尿閉に対する漢方治療の報告は少ない。我々は2007年以降尿閉に対し猪苓湯を用いてきたが、今回症例を増やし猪苓湯の尿閉に対する有効性について検討した。

【対象と方法】バルーン抜去後尿閉が確認できた脳卒中49例(脳梗塞28例、脳出血20例、脳動脈瘤1例)を対象。治療は、1.バルーン抜去後尿閉が確認できた時点より漢方薬(猪苓湯7.5g、分3)を単独投与した群(24例)、2.西洋薬(distigmine,bethanechol,tramsulosin)の投薬で無効後、猪苓湯を併用した群(9例)、3.初回より猪苓湯・西洋薬(distigmine,bethanechol,urapidilなど)併用群(16例)の3群でretrospectiveに検討した。投薬後の効果判定はバルーン抜去後の自尿排泄の確認によった。バルーン抜去は、32例は投薬後14日までに、8例は2~4週、9例は4週以降に行った。

【結果】1群の猪苓湯単独治療は24例中14例(58%)で有効であった。2群の西洋薬単剤の無効例は、猪苓湯の併用により9例中8例に高率に有効となった。1群に2群の猪苓湯の単独併用の有効例を含めると33例中22例(67%)に有効。3群の初回より猪苓湯・西洋薬併用例は16例中12例(75%)で有効であった。猪苓湯による副作用はなかった。

【考察】脳卒中の急性~亜急性期では膀胱は低活動性で尿閉になることが多くリハビリ上その治療は重要である。猪苓湯の証は排尿困難、尿量減少、口渴を訴える場合とされ、利尿作用、排尿筋収縮作用がある。これまでに脳卒中急性期の尿閉に対し猪苓湯とbethanecholの併用が有効であったとの報告がある。

【結論】脳卒中後の尿閉に対し猪苓湯は、西洋薬で無効の場合の併用治療や単独治療としても有効で、とくに副作用もないことから有用性が高い。今後脳卒中後の尿閉に対する治療薬の選択肢の一つとして使用されていくものと考え。